

# 六帖両著に於ける万葉歌

前 野 貞 男

題意の説明をすれば、最初に「六帖」と記したのは「古今和歌六帖」のことで、次に「両著」と受けたのは、石塚龍麿の「校証古今歌六帖」と、山本明清の「古今和歌六帖標注」を指したものであるが、この両著に現れた万葉歌に対し比較検討を試みようとするのが予定の構図である。

石塚龍麿は遠江国の人。明和元年に生れ、文政六年六月十三日に歿した、享年六十である。

寛政元年（二十六歳）本居宣長の門に入り、国語国文の研究に一生を委ね、その業績は「古言清濁考」となり、また「仮名遣奥山路」となつて今に伝へられてゐるが、これらの名著は一日にして成つたものではなく、その基礎作業とも見るべき歌書に関する研究の中、万葉集については「万葉類聚」のほか「万葉集種々考」や「万葉集源流」などの諸著があつて刻苦の跡を偲ばせてゐる。然もなほ私撰集に対する追究は一段と伸展して「校証古今歌六帖」の大著を完成したことは特筆に価する労業であつた。

山本明清は江戸の人。寛政八年に生れ、天保八年二月十日に歿した、享年四十二である。

夙に岸本由豆流の門に入り、歌文の研究に精勵し、上代に関する

ものとしては「万葉集作者部類」を撰修してゐるが、その学識を世に残したものは「古今和歌六帖標注」に外ならない。

石塚龍麿の校証古今歌六帖（略称Ⅱ校証本）は、稿本のまま伝存し、永く世に現れなかつたものであるが、昭和二十七年から三十年にかけて、これを上（一帖二帖三帖）下（四帖五帖六帖）の二冊本に分け、和歌山大学の田林義信教授によつて翻刻上梓された。

今、その内容を概観するに、底本の選定に當つては流布の版本を採用してゐるが、古来の歌書を博搜して校訂を施し、特に本文の出典を究めることに不断の努力を傾け、出典不明の歌には「未考」の二字を註記してゐる。

古今歌六帖といふ名称に対しては、そのやうな書名の本が別伝してゐたとは思はれないから、おそらく龍麿が改称したものか。

巻首に掲げた凡例の終りに「文政の三とせといふとしの二月十一日」といふ日附があり、そのころ上木する予定であつたことが推知されるが、このほかには一切序跋を見ず、且つ公刊の機会をも失つたものと察せられる。

文政三年は龍麿五十七歳のときであり歿去の三年前である。

山本明清の古今和歌六帖標注（略称Ⅱ標注本）は、その歿後六年

を経て（即ち天保十四年癸卯六月に）上木されたが、流布の版本を底本とし、釈契沖および賀茂真淵の校本を参照し、これに岸本由豆流の所説を按配したほか、異本四種を以て校合を加へ、古来の歌書七十二部に徴して異同を尋ね、全巻の終りに拾遺四十七首を追補してゐる。

一帖の初めに、提要・時代・書名・部類・作者・歌数・別本異同・校正書目の八項を設けて解題し「天保二年神無月十日あまり七日の日」といふ日附がある。

序は一帖の巻首に、井上文雄（年月不記）と、伊庭時言（天保十一年八月晦日）の二文を掲げてゐる。跋は六帖の巻尾に、宗師由豆流（天保十一年霜月二十二日）が書いてゐるが、序跋ともに明清歿後の執筆に係る。

この本の成立した天保二年は明清三十六歳のときである。

兩著に明記された万葉歌の配列（延歌数）

類別	校証本	標注本
一帖	一七六	一七六
二帖	一七九	一六九
三帖	一五〇	一四四
四帖	一一九	一二〇
五帖	三九一	三九二
六帖	二三一	二二七
合計	一二四六	一二二八

備考 校証本に於ては、このほかに「未考」と註記しながらも、なほ万葉歌を附載したものが一九首ある。その中の八首については万葉歌に連繫あることを認め得るが、自余の一一首は認めがたく、前者の配列は三帖と四帖に各一首、五帖に

四首、六帖に二首で、この八首をも加算すれば万葉歌の合計は一二五四首となるのであるが、この中には再出歌六一首と三出歌四首を含んでゐるから、これらを差し引いた実歌数は一一八五首であり、また先に加算した未考歌八首を認めないときは一一七七首となるのである。

標注本に於ては、その「提要」の項で、万葉歌を一一〇八首と自算してゐるが、本文の歌詞の肩に万葉歌の表示あるものを累算すれば一二二八首にのぼり、この中には再出歌五九首と三出歌三首を含んでゐるから、これらを差し引いた実歌数は一一六三首であつて、明清の自算一一〇八首よりも五五首ほど多くなつてゐる。

六帖兩著に於ては、校証本の凡例にも、標注本の解題にも、ひとしく契沖の学徳を記してゐて、龍麿も明清も共に「拾遺六帖」の所説に負ふところが大きかつたことは充分に了知されるが、更に標注本の著者は、真淵・宣長・由豆流などのほかに、校証本の著者に倣ふことが少くなかつたものと思はれる。

標注本に於ては、校証本や龍麿に関する所見は全く示してゐないのであるから、これを書中の記載事項から立証することは不可能であるが、兩著の内容を詮索すれば、この推測は失当でないと考えられる。なぜなら、六帖所収歌の出典について、明清の判定には龍麿の調査を参考にした跡がそぞろに察せられるからであり、然も出典の究明は校証本の核心であつて、兩著の内容には單なる暗合として斥け得ないものがあるからである。

校証本の成立は文政三年（凡例による）であつて、標注本の成立は天保二年（解題による）であるから、その間に十一年の星霜を隔

てゐる。然も校証本の著者は宣長門であり、標注本の著者は由豆流門（由豆流は村田春海に学んだ人で且つ春海と宣長は同門）であるから、これらの縁故によつて、明清が龍麿の稿本（又は写本）を手にする機会がなかったものとは云ひ切れないし、龍麿の所説が何等かの形で明清の耳に入つたであらうことも想定し得る。

両著の内容を比較するためには六帖所収の全歌に当らなければならぬこと勿論であるが、今は万葉歌のみを対象にして、その一斑を覗ふこととする。

一帖に挙げた万葉歌の延歌数は両著とも一七六首であつて、全く同歌のみであり、その判定に異同はない。但し平井卓郎博士の調査（国語と国文学第三十五卷第十二号所載・古今六帖における万葉歌）によれば一七三首、私見によれば一八〇首であつて、四者の中、二者のみが歌詞に於ても歌数に於ても完全に一致してゐることは偶然の結果に帰し得ない点もあり、このことは二帖以下の歌詞と歌数を吟味することによつて一層歴然たるものがある。

二帖に挙げた万葉歌は校証本一七九首・標注本一六九首であるが、これは校証本の判定を参考にして、その中から一〇首を明清が除外したものであらう。従つて、この一〇首を明清が認容するときには両著の判定歌数にも異同がなくなるのであるが、然も標注本によつて判定された一六九首は校証本と同歌のみであり、龍麿の判定歌数の範囲から選歌したものであらうことを疑はしめる。この帖に現れた万葉歌数は、平井博士の調査によれば一六四首、私見によれば一七五首で、いづれも校証本の歌数よりも少くなつてゐることは明清の場合と同様であり、この点については三者とも（歌数の相違こそあれ）一致してゐる。

秋萩にしがらみかけてなく鹿の声きゝつゝや山田もるらん（二帖・鹿）

校証本に於ては、万葉十（三三）の歌を挙げ「この歌を誤れるなるべし」と註記してゐるが、ここまで改作されたものを万葉歌と見ること自体に無理があるのであつて、これを埒外に置いた明清の裁量に従ふべきであらう。

宮木ひくあづきの袖にたつ民のやむ時もなく恋わたる哉（二帖・袖）

校証本に於ては、万葉十一（三六）の歌を挙げてゐるが、第二句の「あづき」は万葉の原文に「泉」とあり、第五句の「哉」は「可聞」であるが、その他は全く旧訓のままであるから、これを万葉歌と認めた龍麿の判定は正しい。標注本では、歌詞の右肩に「新勅恋二・古本人丸集・夫雑三」とのみ記して万葉歌と認めてゐないが、これは明清の見落しであらう。

あからまのこしまの関のかためてはいもが心はうたがひもなし（二帖・関）

校証本に於ては、万葉四（三三）の歌を挙げ「この歌を誤れるなり」と註記してゐるが、これは本歌取といふよりも、むしろ語呂に合せて意識的に上三句を改作し（もちろん伝誦によつて生じた異訓とは考へられない）設題の「関」に結びつけたものであることが明白であり、この程度の改作は六帖の撰者の常套手段であるから、龍麿もまた万葉歌と判定したのであらう。標注本では、歌詞の右肩に「夫雑三」とのみ記して万葉歌と認めてゐないやうであるが、然も上欄に万葉歌（即ち龍麿引用の証歌）を掲げてゐる点から見れば、龍麿の判定に心に惹かれたものと推想し得ないこともない。

かみつけやいちしの原のいちしるく我としみえて人にしらるな

(二帖・原)

校証本に於ては、万葉十一(三六〇)同(三五三)同四(六六)の三首を挙げ「……とあるなどをまがへたるにや」と註記してゐるが、これは二四八〇の上三句と六八八(或は三五三)の下二句が混合したものと見做し得る。初句の「かみつけや」は六帖の撰者の作為であるが、第二句の「いちしの原」は万葉の原文に「菟師花」とあり、設題の「原」に結びつけるための改作に外ならず、第四句の「我としみえて」は「吾共咲為而」の誤訓と了解され、第五句の「人にしらるな」は旧訓のままである。標注本では、これを黙殺して、万葉歌の埒外に放却してゐる。

山城のいはたの杜の柞原いはねど秋はいろづきにけり(二帖・森)

校証本に於ては、万葉九(二七三)の歌を挙げ「……とあるを誤れるなるべし」と註記してゐるが、改作も茲に至れば万葉歌とは認めがたい。標注本では、歌詞の右肩に「夫秋六」と記してゐるから、万葉歌の系列には入らしめなかつたもので、これは明清の見解を取るべきであらう。

こひしねとするわざならし玉鉾のつかひも見えずなりゆくみれば(二帖・使)

校証本に於ては、万葉十一(三三三)の歌を挙げ「……とある歌の転じたるにや」と註記してゐるが、この歌のみが単独に転じたものではなく、同四(六六)の長歌「押照難波乃昔之云云」通ひせし君も来まらず玉杵の使も見えずなりぬれば・下略」の中の数句と混合したものと想像される。六帖所収の万葉歌の中には長歌の一部が独立

して短歌の形に纏められたものが七例ある。標注本では、本欄には何等の記事もないが、上欄には万葉歌(即ち龍麿引用の証歌)を掲げてゐて、その出典を句はせてゐることは、龍麿の判定に暗示されたものではなからうか。

百しきの大みや人はおほけれど我思ふ人はことにぞ有ける(二帖・百敷)

校証本に於ては、万葉十一(三三三)の歌を挙げてゐるが、これもまた原形の表現を離れ過ぎた改作である。標注本では、上欄に「百敷」の釈を載せてゐるが、この歌の訓法には何の係はりもないもので、明清自身も万葉歌としての容相を否定してゐるものであることが了解される。

もゝしきの大宮人の玉はこの道にも出ぬこふるこのごろ(二帖・百敷)

校証本に於ては、万葉六(六六)の長歌を挙げ「これも長歌の末を一首としたるなり」と註記してゐるが、原歌は「真葛延春日之山者云云」百敷の大宮人の玉杵の道にも出でず恋ふるこのごろ」であるから、龍麿の判定に疑義はない。標注本では、これを看過してゐるが、明清の注意が及ばなかつたのであらう。

風ふくと人にはいひて戸はさゝじあはんと君にいひてしものを(二帖・戸)

校証本に於ては、万葉十一(三三三)の旋頭歌を挙げ「いさゝか似たる所あり」と註記してゐるが、単に素材の類似点を指摘したものに過ぎない。標注本では、歌詞の右肩に「河海抄・空蟬」と記し、且つ上欄に万葉四(六六)の短歌を載せてゐるが、これは龍麿の引用歌よりも更に粗略なものであり、要するに下句の類似点のみを表示

したものであらう。

ませごしに麦はむこまのはつゝにおよばぬ恋もわれはする哉

(二帖・馬)

校証本に於ては、万葉十四(三三三)同(或本歌)同十二(三六六)の三首を挙げ「……などあるを誤れるなるべし」と註記してゐるが、これは三五三七(或本歌)の上三句と二七一四の下二句が混合したものであらう。標注本では、本欄には何等の記事もないが、上欄には万葉歌(即ち龍麿引用の証歌の中三三三の一首)を掲げ「……とあるうたと又およばぬ恋も(と)いふうたとならび有けんを例の二首を一首に書あやまりたるなるべし」と云ひ、これを万葉歌と他集の歌の混合したものとして扱つてゐる。

三帖に挙げた万葉歌は校証本一五〇首・標注本一四四首であるが、これもまた龍麿の判定歌数の中から明清が五首を除外したもので、このほか標注本には欠歌が一首あるから、合計六首の相違を生じたわけである。然も標注本によつて判定された一四四首は全く校証本と同歌のみであること二帖の場合と変りなく、且つ一帖二帖三帖と連続して、このやうな現象を見せてゐることは、偶然の暗合とは考へられないところで、標注本の著者が、その事実を伏せおいたまま、校証本の著者に倣ふことが少くなかつたものと推定せざるを得ないのである。この帖に現れた万葉歌数は、平井博士の調査によれば一三五首、私見によれば一五三首で、前者は龍麿の判定歌数を遙かに下廻り、後者は僅かに上廻つてゐる。

標注本から除外された万葉歌五首

くだら川かはせをはやみあか駒の足のそゝぎにぬれにける哉

三帖・川〇万六・二四

さは川に氷わたれるうすらひのうすき心を我思はなくに(三帖・橋〇万二十・四六)

さるさはの池もつらしなわざもこが玉もかつかば水もひなまし

(三帖・池〇万十六・三六)

ゆふされば梶の音きこゆあまを舟奥津もかりに舟出すらしも

(三帖・舟〇万七・二五)

しら波のよせつる玉もよのまにも君を見ずてはいもねかねつも

(三帖・藻〇万十七・三六)

標注本から脱落した万葉歌一首

須磨の浦に塩やくほのほ夕さればゆき過がてに山にたなびく

(三帖・潮〇万三・三四)

この歌は、校証本や流布の版本には見えてゐるが、標注本だけが失つてゐるもの、即ち「潮」の条の第十四歌である。但し三書いづれも「潮」の条の第一歌には初句を原歌通り「なほの浦に」として掲げてゐるから同じ条に重出したもの(このやうな例は他の条にもある)と知られ明清が不用意に書き漏らしたものであらう。この歌は更に「海」の条にも初句を「須磨の浦に」と改作して(即ち第十四歌と同じ姿で)採られてゐるから、校証本や流布の版本の場合は三出歌、標注本だけが再出歌になつてゐるのである。

四帖に挙げた万葉歌は校証本一九九首・標注本一二〇首であるが、これは校証本の判定歌数よりも標注本の方が一首だけ多いことに起因してゐる。この帖に現れた万葉歌数は、平井博士の調査によれば一一七首、私見によれば一二一首である。

生の浦につりするあまの舟のりににりにし心つねに忘れず(四

帖・雑思)

校証本に於ては、この歌に対し「未考」の二字を註記してゐるから、一旦は万葉歌の列から放却したもの（従つて本稿の筆者も亦この場合は龍麿の判定歌数に加算しなかつたもの）であるが、然もなほ万葉七（三六）の歌を附載し「これを誤れるにや」として出典を摸索してゐる。標注本では、歌詞の右肩に「万七・夫雑五・古本人丸集」と記してゐるから、これを直ちに万葉歌と判定してゐるのであるが、龍麿が示した出典摸索の例歌を、そのまま出典確定の根拠にしてゐることが明白である。

おかれてゐて恋つゝあらばきの国のいもせの山にあらましもを（四帖・別）

校証本に於ては、この歌に対し「夫木廿・笠金村」と註記して、他集の歌に見立ててゐるが、これは万葉四（三四）の歌である。標注本では、歌詞の右肩に「万四・夫雑二」と記してゐて、万葉歌の範圍に含めてゐるが、ここに現れた判定の相違は既見の例と全く反対になつてゐる。この歌の第二句「恋つゝあらば」は万葉の原文に「恋乍不有者」とあつて、六帖の撰者の誤筆であると了知されるが、その他の部分は全く旧訓のままであるから、これを万葉歌と認めるに憚る点はない筈である。然も亦この歌は両著ともに同じ条の中の六首前に既に収められてゐて、そこでは初二の句を「わかるべき物としりせば」と改作してゐるのであるが、龍麿自身もこの場合は万葉歌と認めてゐるのであつて、このやうな倒錯に陥つたことは千慮の一失と云ふのほかなく、原歌を見落し、却つて改作を認めたといふ皮肉な現象を示してゐる。従つて、この歌は校証本の判定は一回限り、標注本では再出歌になるわけである。

時雨ふるあらし浜べにくれど／＼とほくやゆかん日比つもりて

#### （四帖・旅）

校証本に於ては、万葉十三（三三七）の長歌を挙げ「緑青吉平山過而云云Ⅱ興つ浪来寄る浜辺をくれ／＼と独ぞ我が来し妹が目を欲り〇これを誤れるなるべし」と註記してゐるが、次に又万葉五（六六）の短歌をも附載してゐる。但し八八八の短歌は単に参考として示したに過ぎないものであらう。併しながら、このやうな改作を取りあげることは論外であつて、いかに出典の究明を眼目としてゐるにしても、その見当違ひに対しては弁護する余地もない。標注本では、これを黙殺して、出典も校異も一切記録せず、四帖「旅」の条の一首としてのみ扱つてゐるが、これは明清の見識である。

かくて、この帖で検討された三首の中、最初の歌については龍麿も或る程度まで万葉歌に連繫せしめてゐる（但し明清は直ちに万葉歌に当ててゐるからその判定歌数も龍麿より一首だけ多いことになつたのである）が、次出の歌にあつては龍麿の倒錯であることが了解され、最後の歌に至つては龍麿の誤認であることが明白になつた。然も明清の判定に係る残余の一一七首は全く校証本と同歌のみであつて、ここに龍麿の判定が明清の選歌の上にも甚大な影響を及ぼしてゐるものと推定することは、何等の根拠もない想像説として葬り去られなければならないものであらうか。

五帖に挙げた万葉歌は校証本三九一首・標注本三九二首で、これを計数的に見れば（四帖の場合と同じく）標注本の方が一首だけ多くなつてゐる。この帖に現れた万葉歌数は、平井博士の調査によれば三六四首、私見によれば三九九首である。

うちひさす大官人はおほかれどわきて恋るはたゞひとりぞも

（五帖・わきて思ふ）

校証本に於ては、この歌に対し「未考」の二字を註記してゐる（従つて本稿の筆者も亦これを龍麿の判定歌数には含めなかつた）が、更に二帖「もゝしきの大みや人はおほけれどわが思ふ人はことにぞ有けるとある同じ歌なるべし」と補説を施してゐる。原歌は万葉十一（三三六）に見えてゐるが、二帖の歌を以て、この帖に再出したものと見ることに同意しがたい。標注本では、歌詞の右肩に「万十一・古本集」と記してゐるから、この帖の歌については万葉歌と判定してゐるものと知られるが、二帖の歌に関しては否定してゐること既掲（二帖の項参照）の通りである。

はしきやしあはぬこゆゑにいたづらに此川のせに蓑のすそぬら

す（五帖・蓑）

校証本に於ては、万葉十一（三三六）の歌を挙げてゐるが、素材も証歌も訓法は完全に一致してゐるから、龍麿の判定にも違算はなかつたものと云ひ得やう。標注本では、歌詞を採取してゐるだけで、その他には何等の記事もなく、万葉歌とは認めなかつたものであるが、これは明清の誤算である。

我背子がゆひてし紐をとかめやはたえはたゆともたゞにあふま  
で（五帖・紐）

校証本に於ては、この歌に対し「未考」の二字を註記してゐるのみであるから、万葉歌と認めなかつたものであることは云ふまでもない。但し初句の「我背子が」は万葉の原文に「吾妹児之」とあり、第三句の「とかめやは」は「将解八方」であるが、その他は全く旧訓のままであるから、万葉九（三六九）の歌と判定すべきものであり、これを除外したのは龍麿の失策と見なければならぬ。標注本では、歌詞の右肩に「万九」と記してゐるから、正当な判定を下

してゐると云ふべきであらう。

このほか両著とも更に各一首の追補歌を収録してゐるから参考として掲げる。

わぎもこが袖をたのめてあし引の山すげのみをとらできにけり

（五帖・蓑）

校証本に於ては、その註記に「今本に此歌なし夫木によりて補へり」と云ひ、万葉十一（三七七）の歌を挙げて「……とあるを誤り伝へたるものなるべし」としてゐるが、これは本歌取に類するものである。

独ねのこもくちめやも綾むしろをに成までに君をしまたん（五

帖・綾）

標注本に於ては、歌詞の右肩に「万十一・新千恋二・古本集」と記し、且つ上欄には「本文題のみにて歌かけたり今はエ本蔵本にて補へり」と表示してゐるが、これは万葉十一（三三六）の歌と判定される。

これら各一首の追補歌は、それぞれに両著の対象本には含まれてゐないものであり、従つて、両著が相互に万葉歌から除外したものは、校証本の二首と、標注本の一首であるから、合計三首に過ぎず、これを差し引いた標注本の判定歌（校証本は既掲の通り二首まで未考歌で本稿の筆者も判定歌数に計上してゐないから此の場合は標注本から差し引くのが正当である）は三八九首となるわけで、これは全く校証本の該当歌と一致し、ここに又あまりにも近似した判定条件が現れてゐるのである。

六帖に挙げた万葉歌は校証本二三一首・標注本二二七首であるが、然も標注本には追補歌一首が含まれてゐるから、これを留保し

た二二六首は全く校証本と同歌のみであり、これも龍麿の判定歌数の中から明清が抽出したものであらうと推察される。この帖に現れた万葉歌数は、平井博士の調査によれば二二九首、私見によれば二三四首である。

標注本から除外された万葉歌五首

つき草のいたづらにある心哉わがおもふ人のこともつげこぬ

(六帖・月草〇万四・五三)

なにせんに玉のうてなも八重律はへらんなかにふたりこそねめ

(六帖・律〇万十一・二三)

かくしのみあれば物思ひなぐさむと出たちきげばきなく日ぐらし

(六帖・蝸〇万八・四七)

こもち山わかかへるでもみづまでねむと思ふを妹はいかにぞ

(六帖・楓〇万十四・四九)

あし曳のやつをの椿つらくに見るともあかめや植てける君

(六帖・椿〇万二十・四八)

標注本に追補された万葉歌一首

奥山のいは蔭に生る菅のねのねもころ我もあひ思はざらん(六帖・菅〇万四・五)

この追補歌は、もちろん校証本には採取されてゐないものであり、相互に比照することは出来ないが、標注本に於ては、歌詞の右肩に「万四」と記し、且つ上欄には「此おく山のいはかげに生るといふた流布本になし今はエ本にておきなへり」と表示してゐて、この帖に残された標注本の判定歌数に一首を増加せしめてゐるのである。

両著に共通する万葉歌数

一帖 一七六(校証本・標注本とも判定の全歌数)

二帖 一六九(校証本 $\parallel$ 一七九の内 $\nabla$ 標注本 $\parallel$ 判定の全歌数)

三帖 一四四(校証本 $\parallel$ 一五〇の内 $\nabla$ 標注本 $\parallel$ 判定の全歌数)

四帖 一一九(校証本 $\parallel$ 判定の全歌数 $\nabla$ 標注本 $\parallel$ 一二〇の内)

五帖 三八九(校証本 $\parallel$ 三九一の内 $\nabla$ 標注本 $\parallel$ 三九二の内)

六帖 二二六(校証本 $\parallel$ 二二一の内 $\nabla$ 標注本 $\parallel$ 二二七の内)

ここに示した共著共通の判定歌(延歌数)については、既に各帖別に検討を加へておいたが、今その要旨を再記する。

一帖に於ける両著の判定歌とその歌数は完全に一致してゐる。

二帖に於ける標注本の判定歌は悉く校証本の判定範囲に包含されてゐる。

三帖に於てもまた同じ。

四帖に於ては校証本の判定歌の全容がそのまま標注本に採収されてゐる。

五帖に於ては両著共通の判定歌に対し校証本二首・標注本三首の微差を見るのみ。

六帖に於ては標注本の追補歌一首を除外すればその他は悉く校証本の判定範囲に包含されること二帖および三帖の場合と全く変りがない。

両著に現れた万葉歌を比較するとき、このやうな結果が得られるわけであるが、これは果して何を意味するものであらうか。

龍麿判定の万葉歌は一二四六首であるが、明清の判定は一二二八首であつて、然も両著に共通するものは実に一二二三首にのぼつてゐる。即ち明清の判定するところは僅かに五首を残して、悉く龍麿の判定範囲に包含されてゐるのであるが、然もこの五首の中には標



注本のみが単独に有する追補歌二首を含んでゐるから、これを除外すれば更にその差を三首まで縮め得るのである。

因に云ふ。本文中に追補された万葉歌は、校証本に三首、標注本に四首を算するが、その中の各二首は両著いづれにも採取されてゐるから、校証本のみが単独に有する追補歌は一首、同じく標注本の場合は二首となるのである。

両著共通の追補歌二首

秋の野にいまこそゆかめものゝふのをとこをみなの花にほふ見  
に（三帖・秋の野〇万二十・四三七）

冬ごもり春の大野をやく人はやきたらねばや人のむねやく（二

帖・雑の野〇万七・三三三）

校証本単独の追補歌一首

（五帖・衰〇既掲）

標注本単独の追補歌二首

（五帖・綾〇既掲）

（六帖・菅〇既掲）

茲に至つて推案するに、両著共通の判定歌一二三首に對し、標注本の計数は五首（追補歌二首を除外すれば三首）の微差を持つに過ぎないのであるから、その実態は殆ど校証本の判定範圍に從属してゐるものと見做し得るであらう。

また校証本と標注本の計数の開きは、前者が後者の判定を一八首（追補歌一首を除外すれば一七首〇標注本の追補歌二首をも減去すれば一九首）も上廻り、且つ両著共通の判定歌に對しては二三首の比差があり、もしこれに「未考」の一九首（但し万葉歌を附載したもの）をも加算するときは更にその示差も一段と増強され、龍麿の

判定範圍が明清の場合より幅広いものであったことを充分に裏づけることが出来る。

六帖に現れた万葉歌の判定に對しては各人各様の結果を生ずることも亦やむを得ない現象とされてゐる。なぜなら、誤伝・改作・本歌取などによつて、万葉歌本来の訓法（この場合は旧訓）を保持し得なかつた歌が多いからである。

これらの事情はあるにしても、標注本の判定歌が殆ど校証本の判定範圍に固着してゐるといふ形相は否みがたく、これを換言すれば、明清の判定は、龍麿の調査を參考にして（或は基礎にして）の所産であつたらうことを推想せしめるのである。

然もまた山本明清は、自著「古今和歌六帖標注」の冒頭に詳細を極めた解題を掲げてゐるにも拘らず、石塚龍麿の名については全く触れてゐないため、両著の内容を相互に比照した結果、本稿の筆者は特にこの疑念を深くしてゐるのである。

附記 これは蛇足になると思ふが、六帖に現れた万葉歌については、判定者の主観により、その歌数も一定しないわけで、いかに六帖所収の万葉歌の姿が乱れてゐるものであるかといふことが了解されるのである。そして此の事實は善写本の出現によつて、ある程度までの是正を見ることは出来るであらうが、現存の諸版本や翻刻書では解決し得ないままに取り残される問題ではなからうか。